慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	森耕二郎著 リカアド価値論の研究
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.3 (1926. 3) ,p.405(137)- 409(141)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260301-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

究者も亦畢竟地理學者でなければならないのである。又他面から之を見るに地上至る所に於て地球の自然は經濟に其の道を指示し且つ至る所に於て經濟的人間は土地の特質を變ずるものであるからして、何人と雖も一國土の純然たる自然科學的地相を指摘する事は出來ないのである。故に又地理學者は總て經濟的事象を理解しなければならない。就中經濟地理學の領域に自ら其の研究を進めんと欲するものは經濟に關する專門學者でなければならないのである。

實に此點に於て經濟地理學の研究は二重の困難に遭遇するのであるが、又同時にそは甚だ重要なる任務を有するものと言はなければならぬ。而してそは二箇の分離せる、且つ相互に努力する專門科學の結合を取扱ふものであるから、其等の體系及び研究方法の結合の中に自ら之が解決手段が見出されるのではなからうか。斯くてSchmidtは次の如く結論して居る。「其處には方法手段即ち地理學的方法があり此處には道具即ち經濟的概念がある。而して製作者は未だ之に慣熟して居ない。故に此の基礎の上に正に融合統一がなされねばならないのである。」(Einleitung .SS. 1-4. S. 172)

新刊紹介

森耕二郎著

リカアド價値論の研究

岩波書店發行
定價參圓五拾錢

本書は著者が「リカアドはその價値論を如何なる意義に於て主張支持し、それを以て諸經濟現象の本質を如何なる程度に於て闡明す可く成功したであらうかを見定めんと志し、それについての樣々の解釋批評を顧みつゝ、それをかなり包括的に徹底的に研究して見ようとした」其成果に外ならないと稱せらるゝものであつて、緒論本論結論の三部門に分たれて居る。就中緒論はリカルドォ價値論の重要と批評の諸態度と目的とを論じたるものであつて、著者はリカルドォが純粹なる勞働價値說を成形發展せしめたるのみならず其が現今の資本家的社會に於ける交換現象に妥當するものと爲したる點及び其を基本原理として總ゆる經濟現象を說明せんとしたるより經濟學を一つの科學に推し進むるに至りたる點等を擧げて第一の主張を立て終り、次にリ氏價値論に對する諸家の解釋批評には是を勞働價値論に外ならずと解して反對するものと、マーシャル、デイチエルなどの如く折衷的立場より是認せんとするものと、リカアデナアの如く表面的皮相的に祖述せんとするものと、リ氏價値論の未熟なる點を補正しつゝ是を生長完成せしめんとするものとの四つありとなし、是等の中何れが最もよく肯綮に中れるものなるかは本論に於て吟味せんとする所であると言つて居る

リ氏價値論の目的に關しては著者は其が分配論に在ることを指摘したる後に於て「斯樣にリカア

ドに在りては彼の價値論は重要であり、そうしてそれは彼の全經濟理論の論理的出發點とせられてゐるのであるが、しかし彼の分配論を論ずるものにしてこの二者の密接なる關係を顧みることによりその本質を理解しやうとするものが殆んどない」としてヂードやドゥニースがリ氏がマカロック宛の書翰に於て「要するに地代勞賃利潤の大なる問題は全生産物が地主資本家勞働者の間に分配されるその割合を決定することから瞭にせられねばならぬそうしてそれは價値論と本質上密接なる關係はない」と云へる言を引用してリ氏の價値論より分配論を引離さんとするを論難し、リ氏の此言は「價値論そのものは分配法則そのものではないと云はんとしたものであらう」と解しながら初めの主張を支持して居らるゝ。而して是と共に緒論は終るのであるが此最後の點は恐らくは世人の非難を少しも容れざる程に强固なるものではないであらうと筆者は私かに考へつゝあるのである。

閑話休題、著者は本論を三篇に大別し第一篇に於てはリ氏價値論の研究對象並びにリ氏價値法則の妥當限界等を述べ第二篇に於てはリ氏價値論の修正を論究し第三篇に於ては地代論勞賃論利潤論等を價値論との關係に於て說いて居る。而して其所論の大要は先づ第一章に於てはリ氏價値論の研究對象が交換價値に在りて使用價値に在らざること、從て一部の學者の如くリ氏が勞働と並べて效用を價値決定の一要素となしたりと解するは全然是認し難きことを明かにし――筆者は此點は全く著者の言の如しと言ひたい――第二章に於てはリ氏價値論の妥當限界は場所的には單に「原始社會にのみ妥當すべきであるとしたのではなくして、それは總ゆる社會を通じて（彼に於てはそれが永久的なる唯一の社會即ち資本家社會として現はれてゐるのであるが）妥當すべきであるとしたのである」物的には任意不可增性の貨物について妥當するのである。而してリ氏が其の價値法則を斯の如く任意可增性貨物に限定したる點は獨逸歷史學派墺太利學派の多くの者が非難する所であるが、是は「決して彼の價値論の缺點ではなく寧ろ其長所であると言はねばならぬ。交換の對象物たる貨物を全部的に漏れなく包括し其交換價値如何をたづねんとするは決して現今の歷史的なる生産關係の、從つて又商品價値の本質を闡明する所以ではない」と極論して居らるゝのである。而して著者の是等の議論はリ氏の價値論は場所的には原始社會にのみ妥當し他の社會には妥當せぬといふ議論を反駁し物的には任意不可增性貨物を除外せるは其妥當の範圍を著しく局限せるものなりと爲す非難を是正する點から見れば甚だ尤もと筆者にも考へらるゝのであるが（イ）物的に妥當する範圍を斯く局限せるは却つて長所なりとせらるゝ點は法則は妥當の範圍が普遍的なればなる程愈々可なりといふ自明の理までも拒否せられたるものであつて此は一方の極端に陷られたるものではあるまいか（ロ）リ氏が自己の價値論は總ゆる社會を通じて妥當すると爲したるは誠に著者の言ふが如くであるが其社會はリ氏に在りては永久的なる資本家的社會として現はれて居ると言はるゝは筆者には全く失當と思はるゝのである。仔細はリ氏の思念しつゝありし社會は生産資本――寧ろ生産手段――の使用せられつゝある社會であつて所謂資本家的社會ではないからである。而して是を斯く解す可き理由は(1)リ氏の資本の定義に徵し(2)リ氏に從へば原始の社會にも既に資本あるに徵し(3)著者が九七頁―九八頁に於て資本主義的社會彼にありては原始社會を含むとして此事を訴りながら承認せられ居るに徵し(4)否更に進んでは「リカアドは生産關係の歷史的發展を意識することなく彼にありては原始社會に於て既に分業があり階級の區別があり私有財産があり自由契約處分自由競爭などが前提せられて居る」としてリ氏を非難しつゝあらるゝに徵して容易に之を知ることが出來るからである。而して一度此點を考慮に加へてリ氏の價値論を檢覈せらるゝならば其は自ら違つた光彩を放つ點甚だ多からうと自分は私かに想像しつゝあるのである。

却說乍併斯は筆者の評言であるから是非は一に讀者の判斷に俟つとして再び紹介に歸れば著者は第三章に於てリ氏が費消勞働價値說をとりたることを擧げ「而してリカアドがかく費消勞働と支配

勞働との概念を分ち費消勞働を以て交換價値決定の唯一の標準としたることは彼が勞働力の價値と勞働の分量との二つの概念を分別し貨物の交換價値は勞働力の價値に依りて決定せられず勞働の分量に依りて決定せらるゝものであり、且つ前者は後者より小であることを認識せるに由るものであると說き第四章に於ては「貨物の交換價値はそれが生産に費されたる勞働の分量により決定測量せらるゝと云ふ命題に於てリカアドは此價値形成勞働を如何に規定するところがあつたであらうか」と云ふ問題を提出し勞働を價値の質的規制者としての勞働と量的規制者としての勞働との二つに分ち前者に關聯してはリカルドオは勞働の單位を認めたが其單位の本質を把握するに至らなかつたことを指摘して玆に彼の價値論の未熟なる一因在りとなし後者に關聯してはリ氏が價値論の規制者として認めたるは平均勞働分量なりと爲す說と最大勞働分量なりと爲す說との二つありとして之を紹介したる後に自らの斷案として前者は價値決定の一般的規定であり後者は其具體的に實現せらるゝ規定の一つの場合であると解答して居らるゝやうである。

猶ほ著者は第五章に於て直接勞働と間接勞働を第六章に於て相對價値と眞實(絕對)價値を第七章に於て價値の實體と尺度とを論究して居らるゝが、而して是等の諸章特に最後の章の議論は大に贊成を表せんとする所であるが其紹介は玆には之を割愛することゝして、以下第二篇に就て其大要を言へば著者はリカルドオの擧げたる固定資本流動資本の區別は其自體に於て缺陷あるのみならず他方に於て不變資本可變資本の區別としても頗る不十分なるものである。彼の價値論の修正は玆に萌芽し、彼の利潤論は玆に發生しその價値論は終に其本體より離れんとするに至つたのであると斯う云ふ見地より所謂リカルドオ價値論の內容に立入つて討究せらるゝのであつて其目的の爲めに主題を利潤の相對價値に及ぼす影響と勞賃の相對價値に及ぼす影響とに分ちリカルドオの言を引いて詳細に說明し、最後にリ氏は此修正に依りて彼の價値說を放棄するに至りたるものであらうか否か或者はリ氏は此修正に依りて費消勞働の外に利潤をも明らかに價値構成要素として認むるに至つたものであるから修正は眞に修正なりと爲すが併し勞働價値說に理解あるものはリ氏は利潤を相對價値變動の獨立の一要素として認めんとしたるは事實ではあるが彼の勞働價値說の本質及び所謂修正の內容は利潤を勞働價値より說明す可く已に大體に於て可なり十分なる程度に於て構成せられてゐた、たゞ彼は一歩を進めて利潤を斯の如く餘剩價値として意識的に說明するに至らなかつたに過ぎないと解するのである、自分は此後者に從ふとして自己の態度を表明して居らるゝ。筆者は著者の此表明に對しては是非を云爲す可き地位に置かれてあらぬから沈默するの外はないが、リ氏が是等の修正の後に於ても勞働價値說を守らんとしたる其形跡は彼の「原論」を讀む者の否定し得ぬ所であるから彼の原論を基礎として議論を立つる限りに於ては著者の此表明に贊成せざるを得ないであらうと思ふ。併し問題は「原論」以外に在りとも云ひ得るのであつて此點は實は筆者の迷ひつゝある所たるのである。

第三篇及び結論の所說に就ては筆者は別に其機會と其人ある可きを思ふて一切觸れぬことゝする深く著者と讀者の諒解を請はんとする所である。妄評多罪

（三　邊　金　藏）

理財學會記事

二月九日午後三時より舊演說館に於て理財學會例會を開く。「唯物史觀の先驅者」なる演題の下に平井敎授の講演あり。閉會後萬來舍に於て晩餐會を開く出席者は平井敎授並びに二年幹事小林、奧田、野村、武井、血脇、一年幹事。森、塚本、內田、細居、久野にて歡談、數刻八時散會す。